Contents

1 はじめに..... 1

2 全般..... 2

3 リポジトリサーバ..... 6

4 管理サーバ..... 9

5 Web 管理サーバ..... 11

6 オペレータコンソール..... 12

7 管理クライアント 13

Appendix SQL Server のアップグレード……21

AppManager 3.4J から 4.0J へのアップグレード補足資料

第 1.1 版 March 25, 2002

1 はじめに

この文書は、NetIQ AppManager 3.4J の環境を AppManager 4.0J にアップグレードについて記述したものです。製品に含まれる「AppManager アップグレードと移行ガイド」等のドキュメントを補足するために作成されたものです。

1.1 アップグレードとは

お客様が AppManager3.4J から 4.0J にバージョンアップを行うことをアップグレードと呼んでいます。AppManager では、お客様がスムーズにアップグレードを完了して頂けるように次の機能を提供しています。

- **混在環境のサポート**
  管理クライアント（監視対象サーバ）が多数存在する環境では、すべてのマシンを一斉にアップグレードすることは事実上不可能です。AppManager は、異なるバージョンの混在をサポートしています。AppManager4.0J の管理サーバは、3.4J および 4.0J のエージェントを同時に管理することが可能です。

- **情報の移行**
  リポジトリ(QDB)に格納されている次の情報は、アップグレード後にも維持されます。
  1)ジョブ
  2)イベント
  3)グラフデータ
  4)セキュリティ
  5)Knowledge Scripts
  6)ライセンス

- **監視の継続**
  管理クライアントをアップグレードした場合、設定されているスケジュールやパラメータを引き継ぐため、3.4J の際に実行していたジョブをアップグレード後にも継続して実行することが可能です。

- **操作性の維持**
  オペレータコンソールをアップグレードした場合、ジョブ／イベント／グラフデータの各リストビューに対して設定していた「グループ化」「フィルタ」が引き継がれます。さらにアップグレード後に AppManager4.0J の新機能である「列のカスタマイズ」や「親の非表示」を設定することも可能です。

- **ジョブの新規作成**
  アップグレードを行うと、リポジトリ内に 3.4J および 4.0J の両方の Knowledge Scripts が格納されます。オペレータコンソール上は両者の区別なく表示されていますが、実際にジョブを作成する時点で、対象となる管理クライアントのバージョンにあわせて適切な Knowledge Script が投入されます。

2 全般

2.1 調査項目

2.1.1 ドキュメント

AppManager のアップグレードを実施する前に、「AppManager アップグレードと移行ガイド」「AppManager インストールガイド」を必ずお読みください。ご不明な点がございましたら、弊社サポートまでご連絡ください。

2.1.2 対象の把握

AppManager コンポーネントを導入しているサーバとコンポーネントおよびバージョンを把握してください。詳細は、「AppManager アップグレードと移行ガイド」の「第 1 章アップグレードの準備」を参照してください。

2.1.3 ジョブ定義情報

アップグレードの過程で、実行中のジョブに関する情報は自動的に移行されます。しかしながら、現在ジョブの定義情報を保存しておくことをお勧めします。また、不要になったジョブはこの機会に削除してください。

現在実行しているジョブ情報は、レポートマネージャの次のフォームで確認できます。

Job Information ジョブ情報

コンピュータ名	ジョブ ID	KS名	詳細	パラメータ値	ジョブステータス
RUBY					
	22	NT_CpuLoaded			Running (Active)
			イベントを発生 (y/n)	n	
			データを収集 (y/n)	y	
			全体の負荷 (y/n)	y	
			CPU使用率 >	70	
			CPUキューの長さ >	0	
			イベント警告レベル	7	

このレポートを HTML 形式等でファイルにエクスポートすることが可能です。

ジョブのスケジュール、アクション、高度な設定については、オペレータコンソールでジョブのプロパティを別途確認する必要があります。

2.1.4 カスタマイズ KS

カスタマイズした Knowledge Scripts の有無を確認してください。

リポジトリをアップグレードすると KS に関して次の情報が引き継がれます。

- 3.4J 用 Knowledge Scripts
- KS に設定されているスケジュール
- KS に設定されているパラメータ
- KS に設定されているアクション
- カスタマイズ Knowledge Scripts（注）

注：標準 Knowledge Script に対して名前を変更せずに、「パラメータの数」「パラメータの名前」「パラメータの型」「ロジック」を変更している場合には、その変更は 4.0J 用の KS には反映されません。アップグレード終了後に、該当する 4.0J 用の KS に対して同様のカスタマイズを行う必要があります。詳細は、「AppManager アップグレードと移行ガイド」の「スクリプトに加えたカスタマイズの復元」を参照してください。

2.2 注意事項

2.2.1 導入順序

AppManager のアップグレードは、次のルールに従って行う必要があります。但し、同一コンピュータに複数のモジュールが格納されている場合には、それらのコンポーネントを同時にアップグレードします。

1) 最初にリポジトリサーバをアップグレードすること
2) リポジトリサーバをアップグレード後、すぐに管理サーバ、Web 管理サーバ、オペレータコンソールをアップグレードすること
3) 同一マシンに複数のコンポーネントがインストールされている場合には、すべて同時にアップグレードを行うこと

2.2.2 レポート

従来 AppManager3.4J のレポート機能として使用していた Crystal Report は、AppManager4.0J から全く新しいレポート機能に変更されました。従いまして、アップグレード後は従来のレポートは使用できなくなります。4.0 から採用されたレポート機能をご使用ください。4.0J の新しいレポート機能については、「AppManager レポートガイド」を参照してください。

注意：

この変更に伴い次の２つのサービスが不要になりますが、アップグレード時に自動的に削除されません。アップグレード後に「サービスコントロールパネル」からこれらのサービスを「無効」に設定してください。

Crystal Web Image Server サービス
Crystal Web Page Server サービス

QDB の Data テーブルから ODBC 経由で Excel や Access 等にデータを抽出している場合、ほぼそのままご使用いただけますが、お客様で動作検証をされることを推奨します。

2.2.3 グラフ

AppManager4.0J からグラフ機能が大幅に強化されました。従来通り、オペレータコンソール内のグラフペインでグラフ表示を行うことも可能ですが、新機能のチャートコンソールをぜひご活用ください。そのため、オペレータコンソールをアップグレードする前に、現在表示しているグラフを削除することをお勧めします。

2.2.4 Knowledge Scripts

AppManager3.4J から 4.0J にアップグレードすると、リポジトリ内に 3.4J および 4.0J の両方の Knowledge Scripts が登録されます。その際に、変更されたプロパティおよび追加されたカスタマイズ KS もそのまま移行されます。

オペレータコンソールの KS ペインでは、3.4J および 4.0J の区別なく表示されています。KS をドロップした対象の管理クライアントのバージョンに応じて、適切な KS がジョブとして投入されます。どのバージョンの KS が適用されるかは、ジョブ定義画面の左下に表示されます。

3.4J 用の KS は 3.4J 管理クライアントにしか適用できません。同様に 4.0J 用の KS は 4.0 管理クライアントにしか適用できません。つまり、3.4J で作成したカスタマイズ KS は、そのままでは 3.4J 管理クライアントでしか使用できません。カスタマイズ KS がそのまま 4.0J 管理クライアントで動作する場合には、アップグレード後に次のいずれかの方法で 4.0J 用 KS としてリポジトリに登録する必要があります。

1) AppManID の変更
   NOTEPAD 等のテキストエディタを使用して、カスタマイズ KS ファイルの AppManID を 4.0J 用に変更してリポジトリにチェックインする。
   例：
   変更前
   '### Begin KP-Version Section
   Const AppManID = "3.4.422.20116.4"
   Const KSVerID = "1.0"
   '### End KP-Version Section
   変更後
   '### Begin KP-Version Section
   Const AppManID = "4.0.258.20120.1"
   Const KSVerID = "1.0"
   '### End KP-Version Section

2) Kscheckin.exe による登録
   kscheckin コマンドに'-v'オプションを指定して、3.4J および 4.0J 用 KS としてリポジトリに登録する。
   kscheckin –e servername:dbname:userid:password –v –k fullpath-to-ks
   例：
   kscheckin –e server1:QDB:sa:xxx –v –k c:\am34scripts\dummy.ebs

上記のいずれかの方法でカスタマイズ KS をリポジトリに登録することで、3.4J および 4.0J の管理クライアントに適用することが可能になります。

2.2.5 監視対象の追加

リポジトリおよび管理サーバを AppManager4.0J にアップグレードした後に、3.4J の管理クライアントを追加することはできません。3.4J の管理クライアントを管理する必要がある場合には、アップグレード前にリポジトリに登録しておく必要があります。

2.2.6 ライセンス

登録されているライセンスは自動的にアップグレードされるため継続して使用可能です。ただし、AppManager 3.4J 用のライセンスを 4.0J に登録したり、4.0J 用のライセンスを 3.4J に登録することはできません。また、アップグレードに伴い AppManager の追加コンポーネントを導入する場合には、別途 AppManager 4.0J 用のライセンスを購入する必要があります。

2.2.7 MDAC バージョンの確認方法

MDAC のバージョンは次の方法で確認することができます。マイクロソフト社のホームページを参照してください。 http://www.microsoft.com/JAPAN/support/kb/articles/JP301/2/02.HTM

ここでは、レジストリによる確認方法について説明します。

HKEY_LOCAL_MACHINE\Software\Microsoft\DataAccess\FullInstallVer

HKEY_LOCAL_MACHINE\Softwrae\Microsoft\DataAccess\Version

上記のキーに設定されている数値が、適用されている MDAC のバージョンになります。

AppManager は、次のバージョンの MDAC をサポートしています。

- リポジトリ　　：MDAC2.5, 2.5SP1, 2.6
- 管理サーバ　　：MDAC2.5, 2.5SP1, 2.6（リポジトリの MDAC と同一バージョン）
- Web 管理サーバ　：MDAC2.5, 2.5SP1, 2.6（リポジトリの MDAC と同一バージョン）
- コンソール　　：MDAC2.5, 2.5SP1, 2.6（リポジトリの MDAC と同一バージョン）
- エージェント　　：MDAC2.1SP2, 2.5, 2.5SP1, 2.6（Access ドライバが必要です）

MDAC の詳細について、マイクロソフト社の次の URL を参照してください。

http://www.microsoft.com/japan/developer/data/

3 リポジトリサーバ

3.1 調査項目

3.1.1 SQL Server

AppManager 4.0J のリポジトリは、SQL Server 7.0 SP1 以上もしくは SQL Server 2000 を実行するコンピュータにインストールすることができます。リポジトリとして SQL Server 7.0 をお使いの場合には、SQL Server 2000 へのアップグレードは必須ではありません。

SQL Server のアップグレードに関しては、Microsoft のサイトを参照してください。

http://www.microsoft.com/japan/sql/evaluation/howtoup.asp

また、SQL Server をアップグレードする前に、必ずデータベースのバックアップを取得してください。

弊社では、現在 SQL Server7.0J をご使用のお客様の場合には、SQL Server 2000 へのアップグレードを実施しないことを推奨します。まれに SQL Server のアップグレードに失敗する場合があります。SQL Server のアップグレードに関する問題につきましては、Microsoft 社にお問い合わせください。

3.1.2 バックアップ

アップグレードを行う前に、必ずバックアップを取得してください。バックアップの詳細については、「AppManager アップグレードと移行ガイド」を参照してください。

3.1.3 MDAC のバージョン

リポジトリを AppManager 4.0J にアップグレードするためには、MDAC2.5 以上が導入されている必要があります。SQL Server が 7.0 の場合には、MDAC2.5 もしくは MDAC2.5SP1 を適用してください（MDAC2.5SP1 を推奨します）。SQL Server 2000 の場合には、MDAC2.6 になります。リポジトリにアクセスする他のコンポーネント（管理サーバ、オペレータコンソール、Web 管理サーバ）は、ODBC 接続でリポジトリに接続します。そのため、それらのコンポーネントが別のコンピュータに導入されている場合には、リポジトリサーバとリモートコンピュータの MDAC のバージョンをあわせる必要があります。

3.1.4 オペレータコンソールのユーザ設定（リポジトリ）

オペレータコンソールの「ファイル」「ユーザ設定」「リポジトリ」で設定している内容は、アップグレードプロセスで自動的に移行されます。しかし、実際にアップグレードを行う前に設定している内容を確認してください。

3.1.5 ディスク容量の確認（リポジトリ）

QDB データベースをアップグレードするためには、既存 QDB データベースサイズの 2 倍以上の空き領域が必要です。事前に QDB のデータベースサイズを確認の上、十分なディスク容量が確保できることを確認してください。

3.1.6 Web 管理サーバのユーザ設定

リポジトリをアップグレードすると、Web 管理サーバのユーザ設定はクリアされます。必要に応じて変更内容を書き出してください。

1) ブラウザ上で、http://<WMS>/netiq をブラウズ
2) 各ユーザ ID でログイン
3) ユーザ設定をクリック
4) 内容を印刷

3.2 注意事項

3.2.1 SQL Server への接続状況の確認

リポジトリをアップグレードする前に、SQL Server に接続している「すべての」アプリケーションを終了してください。特に他のマシンから接続を行う可能性があるアプリケーションは、必ず確認を行ってください。代表的なアプリケーションとしては、

- オペレータコンソール
- Web 管理サーバ (World Wide Web Publishing Service)
- Crystal Report (Crystal Web Image Server, Crystal Web Page Server)
- Microsoft Office
- SQL クライアントユーティリティ
- SQL エンタープライズマネージャ

があります。

インストーラは、ローカルマシン上の次のサービスは自動的に停止しますので、明示的に停止する必要はありません。

- NetIQms
- NetIQccm
- NetIQmc
- World Wide Web Publishing

3.2.2 インストールオプション

アップグレード中に次の画面が表示されます。



ここで、「リポジトリのアップグレード」を選択すると、既存の内容が自動的に移行されます。「既存のリポジトリを置換」を選択すると、既存のリポジトリは削除され新たに作成しなおされます。アップグレードを行う場合には、「リポジトリのアップグレード」を選択してください。

リポジトリデータベースを作成し、すべてのインストールが終了した後に SQL Server サービスを再起動してください。

4 管理サーバ

4.1 調査項目

4.1.1 リポジトリの確認

リポジトリサーバと別のコンピュータに導入されている管理サーバをアップグレードするためには、事前に AppManager リポジトリが 4.0J にアップグレードされている必要があります。リポジトリが 4.0J にアップグレードされていて、なおかつ ODBC 経由で正しく接続できることを確認してください。

管理サーバは、次の情報を元にリポジトリサーバにアクセスします。

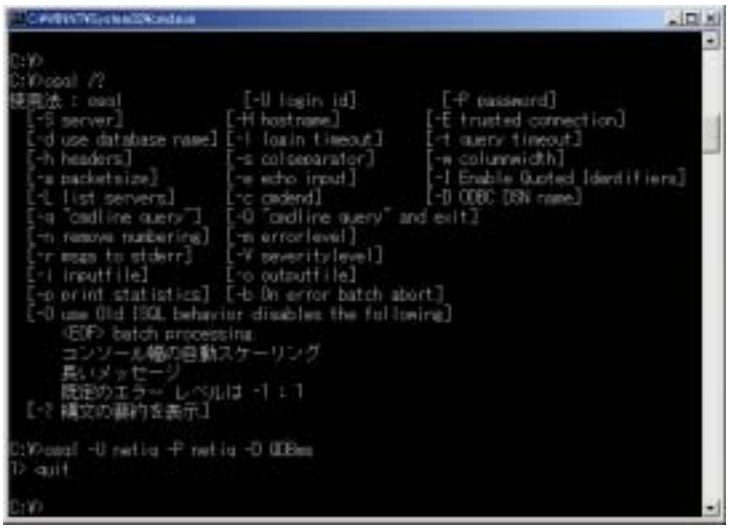
プロトコル：SQL ODBC

システム DSN：QDBms

ユーザ：netiq

netiq ユーザのデフォルトパスワードは、netiq です。

次のように OSQL コマンドを使って、接続性を検証することができます。



4.1.2 レジストリの変更確認

ポーリング間隔などレジストリの値を変更している場合には、それを文書に書き出してください。アップグレードでは既存のレジストリ設定を保持するか、新しく作成しなおすかを選択することができます。保持するオプションを選択した場合には、自動的に現在のレジストリ設定を移行しますが、アップグレード後に正しく値が設定されていることを必ず確認してください。特にレジストリの値を変更していない場合には、確認の必要はありません。新しく作成しなおすオプションを選択した場合には、必要に応じて該当するレジストリを変更してください。

HKLM\Software\NetIQ\NetIQms – NetIQms に関する設定

4.2 注意事項

4.2.1 NetIQms サービスのアカウント

アップグレード中に、NetIQms を実行するアカウントを入力します。今まで使用していたアカウントを入力してください。デフォルトは、ローカルシステムアカウントです。

5 Web 管理サーバ

5.1 調査項目

5.1.1 Web 管理サーバのユーザ設定

リポジトリをアップグレードすると、Web 管理サーバのユーザ設定はクリアされます。必要に応じて変更内容を書き出してください。

1) ブラウザ上で、http://<WMS>/netiq をブラウズ
2) 各ユーザ ID でログイン
3) ユーザ設定をクリック
4) 内容を印刷

Web 管理サーバをアップグレード後に、必要に応じてユーザ設定を登録しなおしてください。

5.1.2 MDAC

Web 管理サーバをアップグレードするコンピュータの MDAC のバージョンは、リポジトリサーバの MDAC のバージョンと同一である必要があります。必要に応じて MDAC をアップグレードしてください。

5.2 注意事項

5.2.1 Web 管理サーバの停止

Web 管理サーバのアップグレードの途中で、IIS サービスは一時的に停止されます。正常にインストールが終了すると自動的に起動されます。

6 オペレータコンソール

6.1 調査項目

6.1.1 導入済みアプリケーション

AppManager 3.4J のオペレータコンソールは、次のアプリケーションから構成されています。

- オペレータコンソール
- オペレータコンソール MMC スナップイン
- レポートマネージャ
- セキュリティマネージャ
- 分散イベントコンソール
- デベロッパーコンソールユーティリティ

AppManager 4.0J のオペレータコンソールは、3.4J の「セキュリティマネージャ」が削除されています。アップグレードの際には、導入しているアプリケーションをすべて選択してください。



6.1.2 MDAC

オペレータコンソールをアップグレードするコンピュータの MDAC のバージョンは、リポジトリサーバの MDAC のバージョンと同一である必要があります。必要に応じて MDAC をアップグレードしてください。

6.1.3 オペレータコンソールのユーザ設定（コンソール）

コンソールに対するユーザ設定は、ローカルコンピュータのレジストリ HKEY_USERS に保存されています。この情報は、アップグレードプロセスによって自動的に移行されますが、事前に設定内容を書き出すことをお勧めします。

7 管理クライアント

7.1 調査項目

7.1.1 導入されているエージェントの種類

管理クライアントをアップグレードする場合、そのコンピュータに導入されているすべてのエージェントを同時にアップグレードする必要があります。次のいずれかの方法で、AppManager3.4J で導入されているエージェントを確認してください。

1-1) AppVersion.bat

リポジトリサーバ上で、次のコマンドを実行します。

cd <install-path>\bin\upgrade planning

appversion.bat <output-file> <server-name> <db-name> <user-id> <password>

1) レポートマネージャ

AppManager3.4J のレポートマネージャから次のレポートを出力します。

Discovery - AppManager コンポーネントのバージョン

Discovery - AppManager コンポーネントのライセンス

AppManager コンポーネントのバージョン

コンピュータ	コンポーネント	バージョン
RUBY	Microsoft Internet Information Server	3.4.422.20116
RUBY	Microsoft Transaction Server	3.4.422.20116
RUBY	Microsoft NT Server	3.4.422.20116
RUBY	Microsoft SQL Server	3.4.422.20116
RUBY	Microsoft Windows Management Instrumentatio3.4.422.20116	3.4.422.20116
RUBY	Microsoft Terminal Server	3.4.422.20116
TOPAZ	Microsoft Internet Information Server	3.4.422.20116
TOPAZ	Microsoft NT Server	3.4.422.20116

2) レジストリ

管理クライアント上で、レジストリの次の値を確認します。

HKLM\Software\NetIQ\AppManager

各 DLL のネーミング規則は、qxxxa3.dll の xxx がエージェントの名前になっています。例えば、qnta3.dll は NT/2000 管理オブジェクトを意味しており、qiisa3.dll は IIS サーバの管理オブジェクトを意味しています。

Qiisa3.dll	REG_SZ	3.4.422.20116
Qmtsa3.dll	REG_SZ	3.4.422.20116
Qnta3.dll	REG_SZ	3.4.422.20116
Qsqla3.dll	REG_SZ	3.4.422.20124
Qwin2ka3.dll	REG_SZ	3.4.422.20121
Qwmia3.dll	REG_SZ	3.4.422.20116
Qwtsa3.dll	REG_SZ	3.4.422.20116

7.1.2 MAPI メールを使用している場合の設定内容

MAPI メールを使用するように設定されている場合には、「Exchange サーバ名」「メールボックス（エイリアス）」「プロファイル」の設定内容を確認してください。

アップグレード時に、それぞれ正しい情報を再入力する必要があります。

7.1.3 ローカルリポジトリのパス

現在のローカルリポジトリのパスを確認してください。ローカルリポジトリは、Local-Repository.mdb というファイル名です。デフォルトは、<install-path>\db\Local-Repository.mdb です。

アップグレード時にパスを入力します。パスを変更することも可能ですが、十分な空き容量を確保しているディスクに配置してください。

7.1.4 NetIQmc,NetIQccm サービスの実行アカウント

NT もしくは 2000 のサービスマネージャで、NetIQmc および NetIQccm サービスのスタートアップアカウントを確認してください。アップグレード時に、アカウントの「ドメイン名」「ユーザ名」「パスワード」を入力する必要があります。

7.1.5 NetIQmc のセキュリティ情報

次のレジストリ値を変更して管理クライアントの設定情報を変更している場合には、設定内容を確認しておいてください。アップグレードでは、これらの値を自動的に移行しますが、アップグレード後に正しく設定されていることを確認してください。

HKLM\Software\NetIQ\NetIQmc\Security

- AllowDosCmd : Dos コマンドの実行を許可する管理サーバ名もしくは*（アスタリスク）
- AllowMS : ジョブを許可する管理サーバ名もしくは*（アスタリスク）
- AllowReboot : Action_RebootSystem を許可する管理サーバ名もしくは*（アスタリスク）もしくは空（ヌル）

7.1.6 レジストリの変更確認

ポーリング間隔などレジストリの値を変更している場合には、それを文書に書き出してください。アップグレードでは自動的に現在のレジストリ設定を移行しますが、アップグレード後に正しく値が設定されていることを必ず確認してください。特にレジストリの値を変更していない場合には、確認の必要はありません。

HKLM\Software\NetIQ\NetIQccm – NetIQccm に関する設定

HKLM\Software\NetIQ\NetIQmc – NetIQmc に関する設定

7.1.7 新規エージェントのライセンス

AppManager4.0J からいくつかの新しいエージェントが追加されています。それらのエージェントのライセンスは、次の通りです。

- **AppManager Asynchronous Event Receiver**
  このエージェントは、AppManager for NT/2000 エージェントのライセンスに含まれているコンポーネントです。非同期による監視を実現するこのエージェントは、AppManager for NT/2000 のライセンスをお持ちのマシンに無償で追加することができます。
- **Report Agent**
  このエージェントは、AppManager for NT/2000 エージェントのライセンスに含まれているコンポーネントです。リポートの生成を実現するこのエージェントは、AppManager for NT/2000 のライセンスをお持ちのマシンに無償で追加することができます。レポートの生成を実行したいマシンに導入してください。
- **Web Services**
  このエージェントは、新規ライセンスの購入が必要です。Web トランザクションの監視を実現するこのエージェントを追加する場合には、別途ライセンスをご購入ください。

7.1.8 MDAC

AppManager 3.4J では、エージェント側でのローカルリポジトリのアクセス手段として、DAO もしくは ODBC を選択可能でした。AppManager4.0J では、ODBC のみになります。そのため、ODBC が導入されていない場合には、MDAC2.1SP2 以上を適用する必要があります。エージェント上の MDAC のバージョンは、リポジトリサーバの MDAC のバージョンと同一である必要はありません。

詳細については、マイクロソフト社の Web サイトを参照してください。

MDAC 全般: http://www.microsoft.com/japan/developer/data/

7.2 注意事項

管理クライアントのアップグレードに関しては、必ず「AppManager アップグレード移行ガイド」「AppManager インストールガイド」をお読みください。

7.2.1 バックアップ

アップグレードを開始する前に、必ずバックアップを取得してください。少なくとも次のバックアップが必要です。

・レジストリ – HKLM\Software\NetIQ 以下すべて
・ファイル – AppManager のインストールフォルダ以下すべて
・ローカルリポジトリ – Local-Repository.mdb ファイル

7.2.2 アップグレード順序

管理クライアントをアップグレードするためには、既に「リポジトリサーバ」「管理サーバ」少なくとも 1 台の「オペレータコンソール」が AppManager4.0J にアップグレードされている必要があります。

7.2.3 エージェントのアップグレード

同一コンピュータ内の、すべての管理オブジェクトを同時にアップグレードすることが必要です。インストールする管理オブジェクトを選択する際に、既に導入済みのオブジェクトはすべて選択してください。また、必要に応じて追加オブジェクトを選択することも可能です。その際には、追加ライセンスが必要です。

7.2.4 ローカルリポジトリ

アップグレード中にローカルリポジトリの更新もしくは置換を選択できます。実行していたジョブの情報等を 4.0J に移行したい場合には、「現在の情報を保持して、ローカルリポジトリの更新」を選択してください。「現在の情報を破棄して、ローカルリポジトリの置換」を選択すると、ローカルリポジトリ内の今までの情報はすべて失われますので、新規にジョブを投入することになります。



7.2.5 ディスカバリ

アップグレード中に適切な管理サーバ名を指定した場合には、自動的にディスカバリジョブが開始されます。複数の管理サーバから管理している場合や何らかの理由により管理サーバ名を指定しなかった場合には、手動でディスカバリジョブを実行してください。

7.2.6 レポートエージェント

レポートエージェントは、収集したデータからレポートを作成する機能を提供します。レポート KS をレポートエージェントがインストールされているコンピュータ上で実行します。このエージェントのライセンスは、AppManager for NT/2000 エージェントに含まれています。通常、リポジトリサーバ上にこのエージェントを導入します。レポートエージェントをインストールするには、次のダイアログボックスで「レポートエージェントを有効にする」を選択してください。



7.2.7 MAPI メールを使用している場合

MAPI メールを使用するように設定されている場合には、次のダイアログボックスで、「MAPI メールを有効にする」をチェックします。



NetIQmc, NetIQccm サービスの実行アカウントを指定する画面では、アップグレード前と同様に適切なアカウントを指定します。



適切な「Exchange サーバ名」「メールボックス（エイリアス）」「プロファイル」の設定内容を入力します。


AppManager
Exchange
メールボックス
プロファイル：

Appendix SQL Server のアップグレード

Microsoft SQL Server7.0 から SQL 2000 へのアップグレードについての補足情報について記述します。

SQL Server 7.0 から 2000 へ何らかの理由でアップグレードができない場合は以下の手順でリポジトリ データベースを移行したのちに AppManager のリポジトリ データベースをアップグレードしてください。

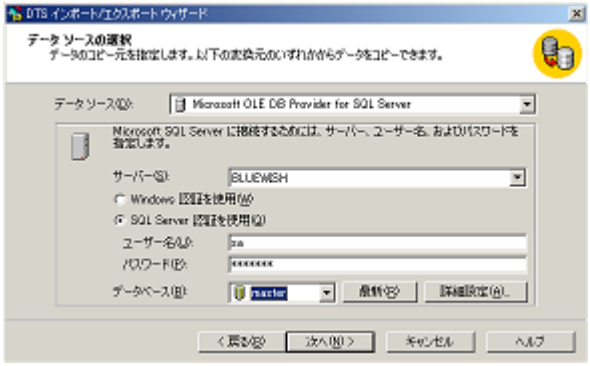
ＤＴＳによる拡張ストアドプロシージャのインポート

1. リポジトリデータベースに接続しているすべてのアプリケーションを停止します。NetIQms , SQL ServerAgent Service、オペレータコンソール、オペレータコンソール MMC スナップイン、オペレータ WEB コンソール、レポートマネージャ、分散イベントコンソール、セキュリティマネージャ、ライセンスマネージャ、リポジトリブラウザなどです。

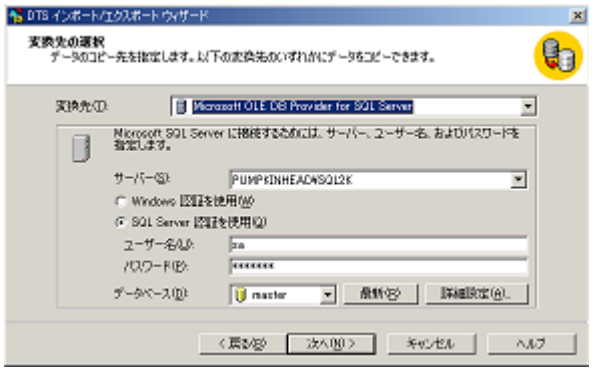
2. Microsoft SQL Server のメニューにあるデータのインポートとエクスポートを実行します。



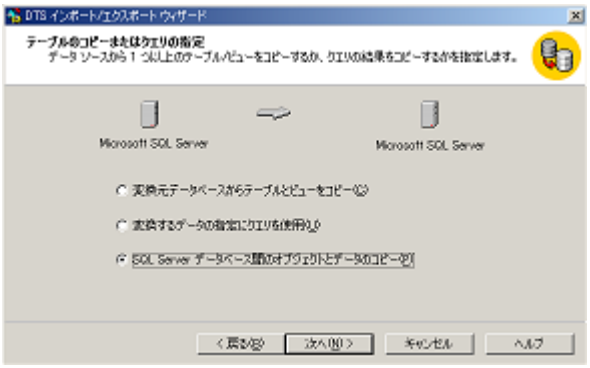
3. データソースのサーバーに移行元の SQL Server を入力します。データベースは master です。



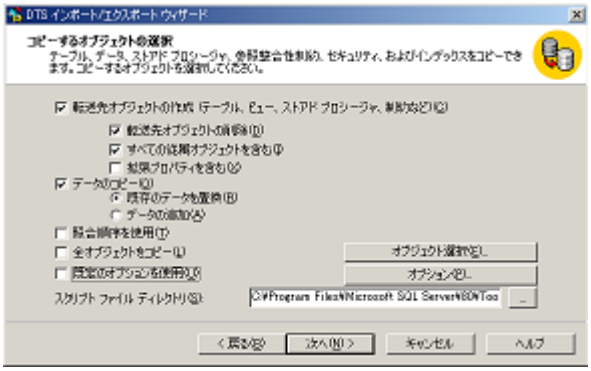
4. 変換先のサーバーに移行先の SQL Server 2000 を入力します。データベースは master です。


DTS インポート/エクスポート ウィザード
変換先の選択
データのコピー先を指定します。以下の変換先のいずれかにデータをコピーできます。
変換先(D):
Microsoft OLE DB Provider for SQL Server
Microsoft SQL Server に接続するためには、サーバー、ユーザー名、およびパスワードを指定します。
サーバー(S):
PUMPKINHEAD¥SQL2K
Windows 認証を使用(W)
SQL Server 認証を使用(Q)
ユーザー名(U):
sa
パスワード(P):
データベース(T):
master
更新(R)
詳細設定(A)...
< 戻る(B)
次へ(N) >
キャンセル
ヘルプ

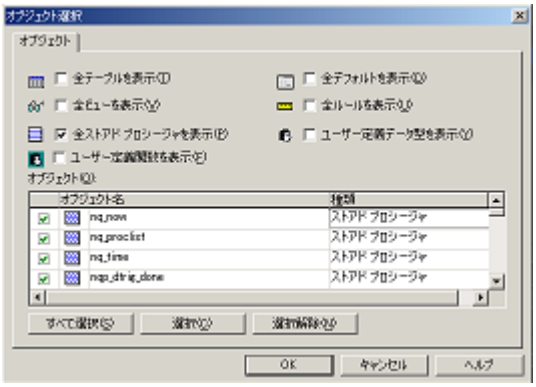
5. SQL Server データベース間のオブジェクトとデータのコピーを選択します。



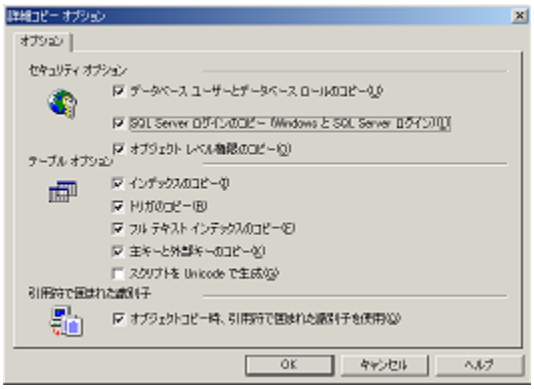
6. 「全オブジェクトのコピー」と「規定のオプションを使用」の選択を解除します。



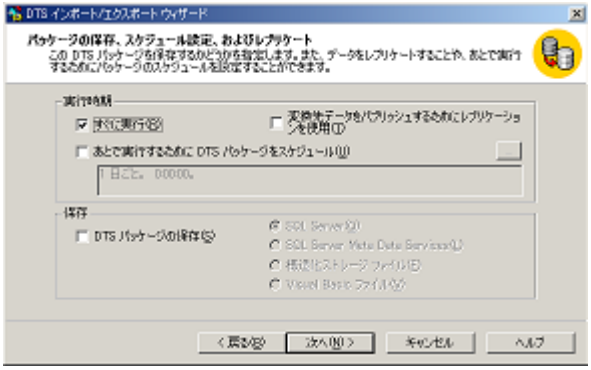
7. 「オブジェクト選択」をクリックし、全ストアドプロシージャ以外のチェックをはずします。
接頭子が nq_ ， nqp_ , nqsql_ ではじまる（拡張）ストアドプロシージャだけを選択します。



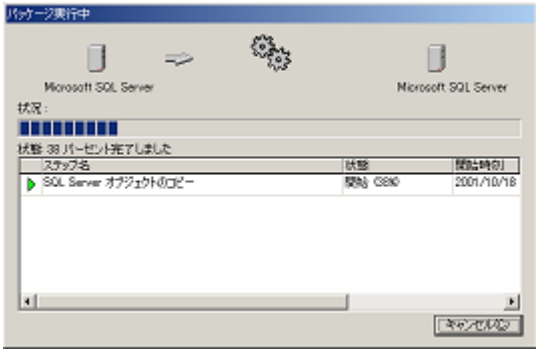
8. 「オプション」をクリックし、「SQL Server ログインのコピー」を選択します。



9. 「すぐに実行」をします。



10. オブジェクトのコピーがはじまります。

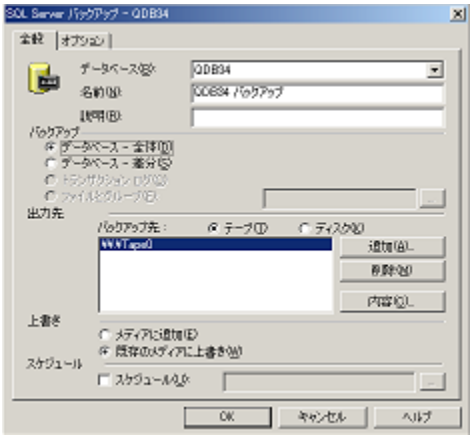


11. リポジトリ データベースの拡張ストアドプロシージャのインポートが終了しました。

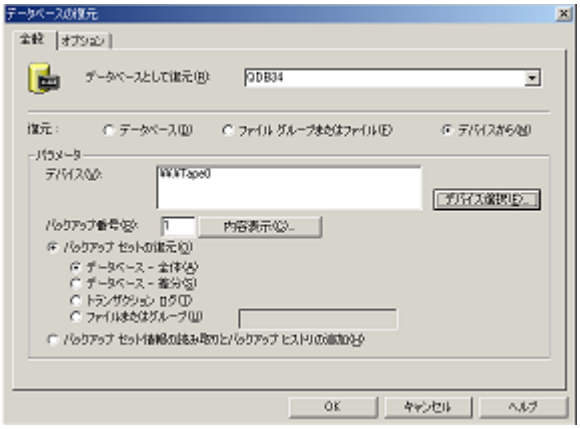


12. AppManager 4.0J 用の nqsql.dll を SQL Server 2000 のインストール パスにある binn ディレクトリにコピーしてください。 この dll は弊社サポートセンタから入手していただくか、他のマシンにて一度、ダミーの リポジトリ データベースをインストールしていただき、SQL Server 2000 のインストールパスにある binn から取り出してください。

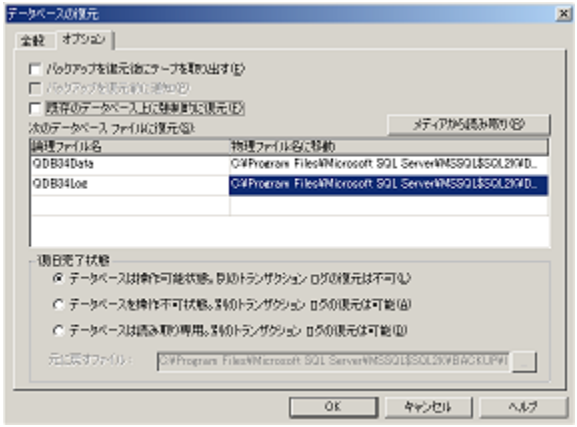
13. 移行元の SQL Server にてリポジトリデータベースをバックアップします。バックアップは SQL Server Enterprise Manager の ツリーからリポジトリ データベースを選択、マウス右ボタンを押し、すべてのタスクにあるデータベースのバックアップから行うことができます。バックアップはデータベース – 全体で行います。



14. 移行先の SQL Server にて SQL Server Enterprise Manager のツリーからリポジトリ データベースを選択、マウス右ボタンを押し、すべてのタスクにあるデータベースの復元を行います。デバイスからバックアップのあるディスク、テープなどを指定します。



15. オプションタブを選択し、リポジトリ データベースの復元場所を「物理ファイル名に移動」に入力します。 SQL Server のインストールパスにある Data ディレクトリ以下が一般的ですが、将来リポジトリ データベースが大きくなってもいいように、システム ディスク以外の十分に空き容量のある論理ディスクを指定することをおすすめします。



16. リポジトリ データベースの復元が終了した後に、ログイン ユーザの SID を更新します。

SQL Server Enterprise Manager のツールから SQL クエリ アナライザを選択して以下の SQL 文を実行します。

```
sp_configure 'show advanced options', 1
go
reconfigure
go
sp_configure 'allow update', 1
go
reconfigure with override
go
/* リポジトリ データベース名は適時、先に復元したものを指定してください 通常は QDB です */
use QDB
go
/* dbo に netiq ログイン ユーザの SID を設定します */
update sysusers set sid = ( select sid from master.dbo.syslogins where name = 'netiq' )  where name
= 'dbo'
go
/* 他の データベース ユーザの SID をリポジトリ データベースの sysusers に再設定します */
declare @name sysname
declare @sid varbinary(85)


declare my_cur cursor for select l.name, l.sid  from master.dbo.syslogins l, sysusers u where l.name
= u.name and l.sid <> u.sid
open my_cur
```

```
fetch my_cur into @name, @sid
while ( @@fetch_status = 0 )
begin
   select @name
    update sysusers set sid = @sid where name = @name
    fetch my_cur into @name, @sid
end
close my_cur
deallocate my_cur
go
sp_configure 'allow update', 0
go
reconfigure with override
go
```

17. SQL Server Enterprise Manager を終了します。
18. AppManager のセットアップを開始し、リポジトリ データベースのアップグレードを行います。リポジトリ データベースのアップグレードの完了を確認後、他のモジュールをアップグレードします。もし、SQL Server のみ他のマシンに移行した場合は、監視 サーバにて ODBC システム DSN の QDBms が参照している SQL Server を新しい SQL Server 名に変更、接続の確認を行った後に他のモジュールをアップグレードしてください。
19. SQL Server のサービスを再起動してください。